

南極から帰って

まえがき

今回の南極予備観測には 地質調査所からも2名が参加したが 菊池技官（地質担当）は越冬隊員として現地に残留し 立石技官（人工地震の観測）は観測基地建設後帰国したので 次にその一端を紹介しよう

私は南極予備観測隊の一員として、昨年11月8日に東京港をあとにし、168日目の本年4月24日に無事東京港晴海棧橋へ帰港した。

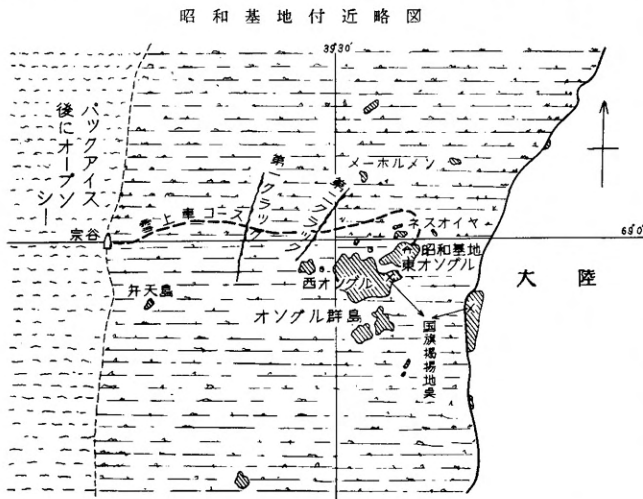
暴風圏を突破して1月4日に初めて冰山に遭遇し、7日にはエンダービー・ランド岬沖でついに南極大陸の山々を望見することができ、また付近の氷上にペンギンやアザラシが遊ぶのを見て、何ともいいようのない感慨を覚

えた。

1月10日に観測船「宗谷」は随伴船「海鷹丸」と別れて浮氷群の中に入り、14日にはクック岬の沖合に到達した。

水上機とヘリコプターで同地域一帯の偵察を終えた後、クック岬と向い合っているオラフの沖からリュツォホルム湾へ群氷を火薬で爆破しながら進入し24日の昼すぎ、青氷とよばれる定着氷の縁に接岸することができた。

氷の厚さは2m以上



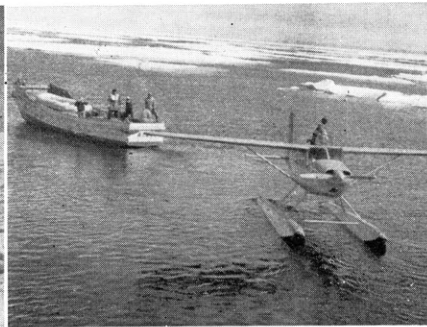
備考 斜線の地域は露岩部 宗谷～基地約17km 基地～大陸 約5km

で、宗谷の砕氷能力ではこれ以上進入することは不可能であった。

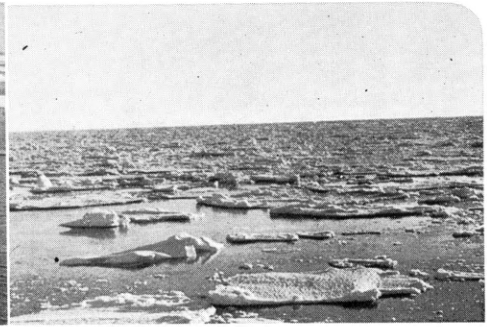
その到達した位置は南緯 68° 59' 48" 東経 39° 08' 45" で、今までどこの国の船も近寄れなかつた所である。



氷海で活躍したヘリコプター



水路の発見・氷の状況偵察・航空写真の撮影等に威力を示したセスナ機(さち風)



浮氷群(バックアイス) 風のために氷がぶつかり合い縁がもり上っている

それから離岸の日までは、基地建設のために、観測隊の主基地と決められた約 17 km 先のオングル島への資材運搬の仕事が総動員で懸命に続けられ、私も雪上車を運転してオングルまで何回か往復したが、氷の状態は意外に悪くて途中パドルと呼ばれる水溜りの中に雪上車を落してしまつて難儀をしたこともあつたが、今となつてみるとなつかしい思い出の 1 つになつている。

オングル主島は東オングル・西オングルの 2 つの島に分かれていて、昭和基地を設営したのは東オングル島である。この島は先カンブリア紀の片麻岩からなり、周囲は 10 km ならず標高最高約 45 m の丘陵性の小島であつ

て、島内には幾つかの湖が散在している。なお基地を設営した場所から大陸まではわずか 5 km にすぎない。

現地にいる間に 4 日程の短い日数ではあつたが、宗谷のすぐそばの水盤と氷山で、地震探査を実施した。その結果から本観測の際、大陸氷の調査についての確信をうることができた。

予備観測隊に参加して南極特有の風物に接したこと、さらに帰りには密群氷に囲まれての立往生中にオーロラをみることはできたのは一生の思い出となつた。

しかしわずか 2 ヶ月足らず、それも真夏の南極の自然

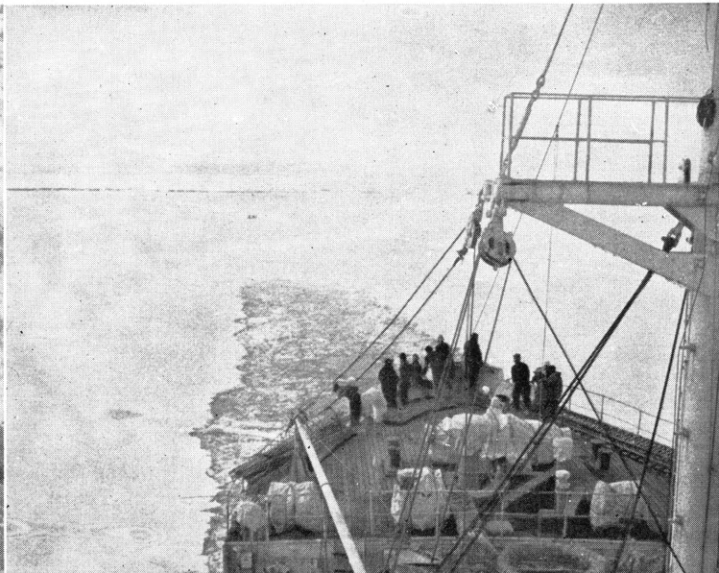
① テーブル状氷山

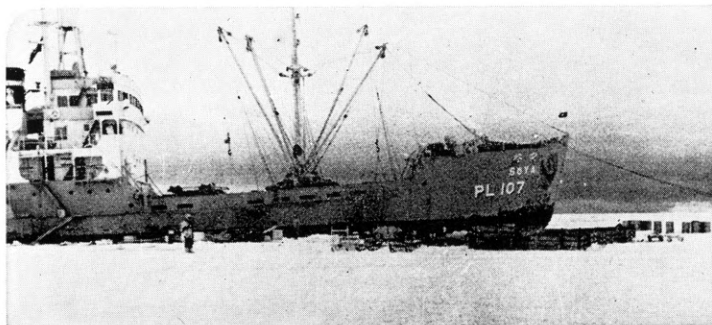
② 爆破用意

電気ドリルで氷に孔をあけ火薬をうめて爆破し氷をわる

③ 接岸寸前 船は前進・後退をくり返し 氷をわりながら進む 速くに黒く大陸の露岩部が見える

①
②
③





接岸し積荷を降ろしている宗谷



宗谷を見物にきた帝王ペンギン

の一端にふれてきたにすぎない私には、あまり多くを語る資格はなさそうである。

来年4月には、第1次越冬隊員として現地に止どまつている鉱床部の菊池技官が帰国するので、南極のだいご味を語ってもらえるものと期待している。

終りにのぞみ、今回の予備観測に際して心からの御支援を下された各位に対して、紙上を借りて厚く御礼申し上げる次第である。

(物理探査部 立石哲夫技官談)

東オングル島付近地質調査予報

調査日程

1957年1月25日 ネスオイヤ島の北側の小島

1月26日 ネスオイヤ島

1月27日 メーホルメン島

2月9日～10日 東オングル島

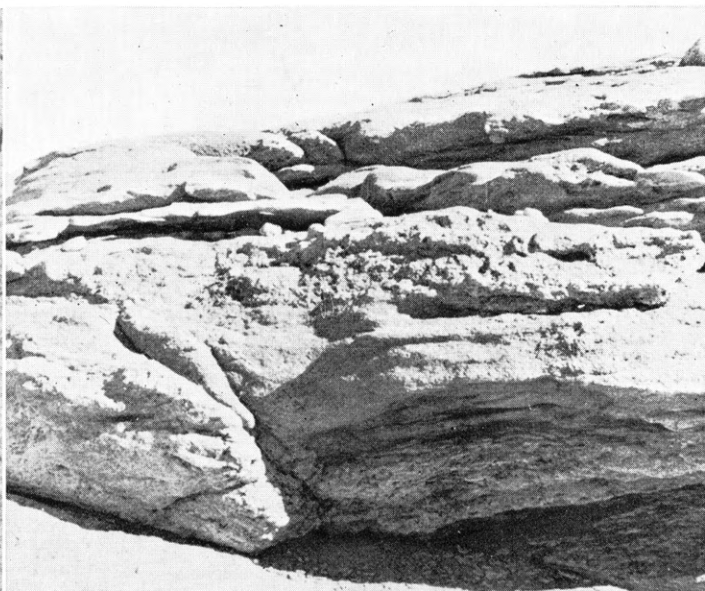
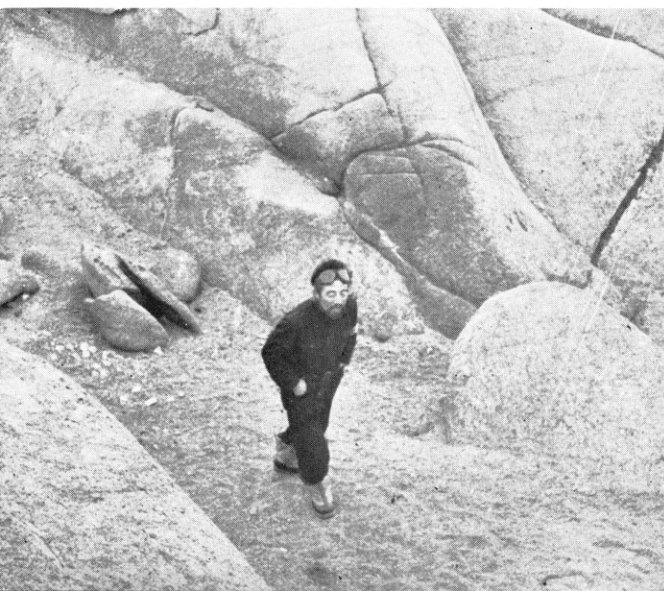
なお 1月25日の基地偵察行のときは渡辺・村山・戸谷の各隊員とスキーを用いて偵察上陸の際 26日は渡辺・戸谷・田・北村・佐伯(栄治)の各隊員と共に犬橇を用いて偵察上陸したとき また27日は宗谷の佐藤航空士の操縦するヘリコプターで着陸の際 また



④ 大ぞり
10頭引で約350kgの荷物をこぶ

⑤ 弁天島の露岩
宗谷が着岸した所から5kmの所にありオングル島と同じく先カンブリア紀の片麻岩からなる

④
⑤⑥
⑥ オングル島の露岩
先カンブリア紀の片麻岩
風化の度が著しい

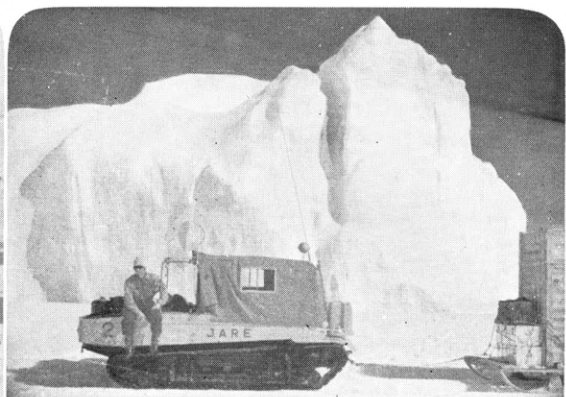




ペンギンと遊ぶ立石隊員



氷の厚さを測る 上の氷 15cm
水 60cm 下の氷 1.5m と測定された



「くずれ氷山」と呼ばれる美しい氷山の前で車をとめて一服 後のそりの荷物は約2t

2月9日・10日は単独にて調査した時のもので いずれも予察程度にすぎない

§ 地 形 §

いずれの島も、氷河でけずられた、なだらかな地形を示しているが、その露岩には氷河の擦痕 (streak) はほとんど見られない。それは、強風と気温の風化作用によって、露岩の表面が円滑化されたものと思われる。

ただし、転石できわめて塩基性の火山岩類などにはこの種の擦痕がみられ、大陸から運ばれたものであろうと

パドルにおちた雪上車 ここはオングル島へいく途中の最大の難所である

想像される。また、露岩の突出部や大きい転石には、しばしば蜂の巣状の穴があり、これらは風蝕の物凄さを物語っている。

§ 地 質 §

この付近の地質は、いわゆる先カンブリヤ紀の片麻岩類からなり、その末期生成によるペグマタイト類の貫入を見るのみである。

片麻岩類は、花崗岩質の部分と進入片麻岩と呼ばれるものとに大別され、どちらかと云えば前者のほうが多く

雪上車の引上げ作業



昭和村風景 (2月6日頃) [その後食堂棟のうしろに居住棟ができた]

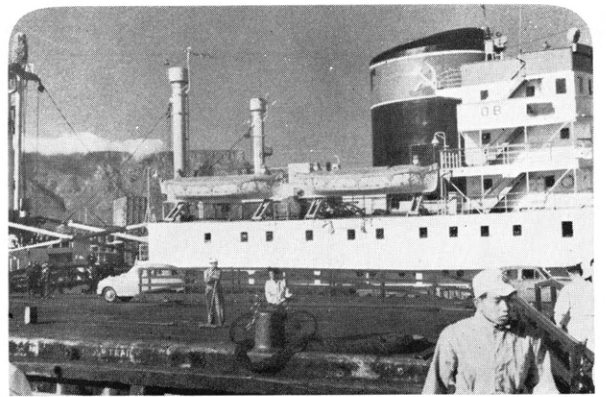
水路を開く爆破作業中



自記気象計



救援にきたオビ号



ケーブタウンに入港のオビ号

いずれも相当多数のざくろ石を含んでおり、特に後者には、その濃縮した部分が認められる。

走向は $N 10^{\circ} E \sim N 70^{\circ} E$ を示し、全体的には $N 20^{\circ} E$ で傾斜は東落しのものが多く、大体 60° 近く急傾しているが時に 20° 前後のものもある。

ペグマタイトには2種あつて、その1つは薄赤色の長石を含有し、雲母やざくろ石等の大結晶を伴うが、他は比較的石英のみからなる。

その前者は片麻岩の走向・傾斜に無関係に貫入しており、他は比較的走向傾斜と一致しているように思われる。また、上記進入片麻岩の一部には、緑泥石化作用が見られ、それには黄鉄鉱を伴っている。また、ペグマタイトの一部には、水鉛鉱がみられる。

(南極地域観測隊報告から 南極地域観測隊員 菊池 徹)



越冬する人たち

向つて右から 中野(医師)・砂田(調理)
菊池(地質)・作間(通信)・村越(気象)
西堀越冬隊長・藤井(設営・報道)・佐伯(設営)
立見(地質)・大塚(設営・発電機)・北村
(設営・観測)の各氏



東京晴海埠頭に帰港した宗谷

タラップを降りる立石隊員(◎印)

